

千里山の果ては今(一)

(千里山駅の東側と永楽園)
二十四回生 奥田 陽一

大正10年に住宅地が開発される前は、今の千里山一帯は佐井寺の農家の人々が所有する畑が拵がり桃、梅、柿、みかんなど果樹が主に栽培されていたそうです。佐井寺からは私たちの通学路だった旧千二小の前を通る一本道が下新田まで続いていました。農作業用の牛車がよくやく通れる細い道です。佐井寺の住人から見ると千里山は「佐井寺の西の果て」でした。

下新田からは急な山道が続く、32阪口善雄前市長が「70年のあゆみ」に寄稿された文章によると、電車が開通した千里山との太いパイプを作る目的で、昭和6年人力による難工事の未現在の道(新道ーしんみち)が出来たそうです。下新田から見ると千里山は「東の果て」です。

これから書こうとするのは小学校低学年の時魚釣り、ドングリ拾い、タンポポ摘みなどに行った一帯の思い出です。「千里山の果て」と書くのは佐井寺や下新田の方々におがましいのですが、家から遠く離れたところへ行く冒険心もあり、学校が終わった後さすがに一人で行くのは怖くて、友達何人かと連れだつて

ました。魚釣りと同様親が知ったら目をむくような遊びだったと思いますが、幸い池にはまることも生き埋めになることもありませんでした。

そのころ千里山線の折り返し地点の崖の北側で住宅地の開発が始まりました。友達の家がよりよく遊びに行きました、最初は千里山に珍しい応急のバラック建てで中で遊ぶには楽しかったのですが、周りに住宅が建ち始める頃には堂々たる本建築に建替えられました。当時はダンプカーなどではなく、線路を敷いてトラックで土を運ぶのを飽きずに眺めたものです。

昭和30年に住宅公団の団地建設が始まり、真っ先に遊び場だった崖が崩されるなどこの辺り一帯は大きく変わりました。団地が完成した後も住宅地はある程度残っていたと思うのですが、昭和44年の阪急電車の延伸工事で殆どの住宅が立ちのきになりました。住宅地に住んだことのある同窓生と確認に行った所、見覚えのある建物は数軒しかないそうです。その千里山団地も建設後50年が経ち建替え工事が進み、オアシス跡にVIBI(ヴィビ)コンミュニティーセンターもある商業施設が開業、駅前広場も工事中で景色が一変しました。画一的な団地様式ではなく、建設会社が設計を競ったそれぞれにデザインが違うマンションが立ち並んでいます。エレベーターは完備されたはずですが、シニア層には団地内巡回バスサービスも欲しいところです。

行った場所です。家には「〇〇ちゃんどこへ遊びに行く」とだけ行って、日が暮れる前には獲物を手にして何食わぬ顔で帰っておいりました。子供の脚で行く場所ですからせいぜい家から30分位ですが、竹やぶや雑木林、ため池、畑などあって、整然と住宅の並ぶ千里山と全く違う場所です。

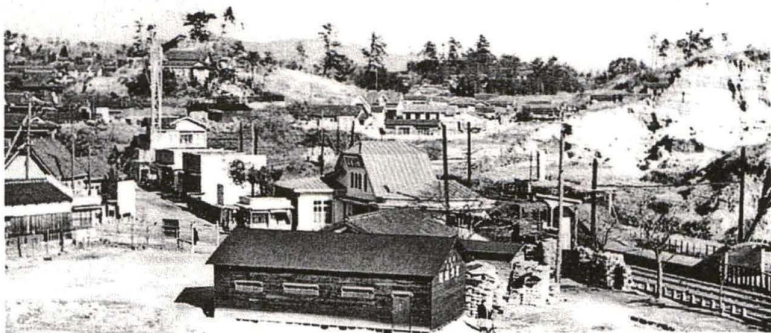
千里山駅の東側

私が千二小に通学していた頃は、地下道をくぐってすぐに「山田寺」か「佐井寺観音」のどちらだったか忘れたのですが、とても目につく道標が建っていたのを覚えていません。

通学路の右手は田圃、左手には小川が流れ雑木林のある小山が続いていました。人家も両側に数軒しかありませんでした。小山にはため池が幾つもあり、「こぶな」や「ボテン」がよく釣れました。時には「赤んぼら」と呼んでいた、お腹が赤いトカゲのような生き物まで釣れ、気持ちが悪くて針から外して池へ返すのに苦労しました。さすがに通学路から人の庭を通って山に入るのには遠慮して、上の噴水から坂を下って山に行きました。

地層が見える崖があり絶好の遊び場でした。子供心には高い崖と思いましたが、せいぜい10メートル位の高さだったでしょうが、脇道を通って頂上まで登った裾の方に小さなシャベルで隠れ家と称して穴を掘り

現千里寺辺りから望む駅前風景と駅東側の崖(千里山70年のあゆみより)



撮影時期は美和遊園(遊具は写っていない)があるので昭和27年から公団千里山団地工事開始前の昭和30年迄の間か。最前方に見えるのは柔道場、鍵が掛かってないので昭和30年頃中学の級友と入り込んで柔道のまねごとをしました。

永楽園

地層の見える崖から少し北へ歩くと大きめの池があり、池の左手から始まる桜並木を進むと左右に住宅が並び「永楽園」と呼ばれていました。野球場の「後楽園」や西宮にある「苦楽園」という住宅地は当時でも知っておりましたが、今思うと「永楽園」は素晴らしい名前だと思えます。

昔の「永楽園」の写真

「70年のあゆみ」より

撮影時期不詳昭和30年代

初期頃か？

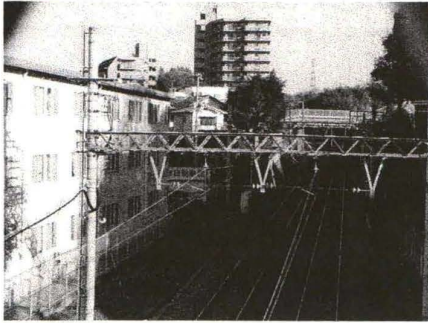
手前に池があり、池の向こう側が「永楽園」住宅地です。池の手前の細道を右の方へ行くと関大職員住宅がありました。



最初に池を訪れた時水際まで簡単に降りていくことができ、釣りの跡らしき場所もあるので喜んで釣りを始めました。待てど暮らせど当たり一つなく、ボテンすら釣れませんでした。私たちは「永楽園の池」と呼びましたが、以後釣りをした覚えはほとんどありません。池の前の細道を行くと関大の教員住宅があり、更にその先へ行くともう佐井寺で、旧精華女学校があると聞いておりましたが、さすがにそこまで足を伸ばすことはありませんでした。女学校跡は現在「證券グラウンド」になっているそうです。「永楽園」に住む友達も居りましたが遊びに行ったりはせず、住宅地内部の様子はどうなっているか殆ど知りませんでした。吹田一中に通いだすと通学路とは別に池の横の階段を上ると朽ちかけた裏門があり、「永楽園」につながっていることが判り時々寄り道して通りました。水のかきいなたため池がもう一つあり、春先のまだ寒い日に友達の身体を洗ったことがあります、幸い誰も元気で風邪一つ引きませんでした。学芸会(卒業生を送る会だったかも)で「世界一周」と題してめいめい外人に扮しました。何人かの身体中に墨を塗ったり絵の具で絵を描いて、腰みのを着けた土人に仕立て上げた時の思い出です。当時一中にはプールはなく、シャワーを採すなど考えも及びませんでした。一中に通った方でも、裏門があったことを知る人は少ないと思います。阪急電車の延伸でこの辺りは切り通しで分断され

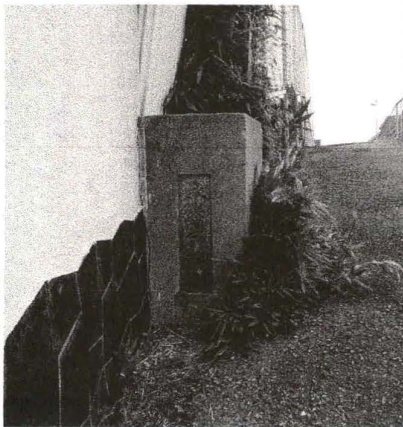
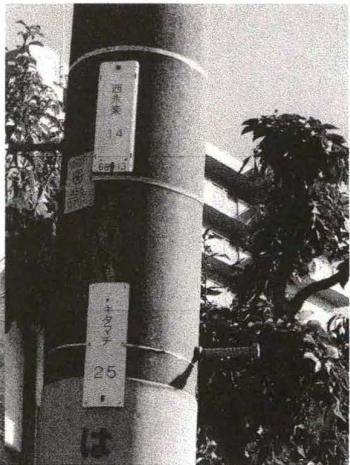
「永楽園」もなくなってしまうのではと心配して、20浅野倉平さんに調査と写真撮影をお願いし、また昨年11月には千里山在住の同窓生に案内を頼んで現地を訪れました。幸い阪急電車は「永楽園」を迂回し「永楽園」内の道筋は昔のままです。

しかし「永楽園の池」はあとかたもなく埋め立てられ、関大自動車部の合宿所が建っていました。家々は千里山同様ほぼ完全に建替えられてしまい、一帯の地名は「千里山西六丁目」に変わり「永楽園」の名は浅野さんが撮られた電柱の写真に「西永楽」とあるのと、線路を跨ぐ「永楽園跨線橋」の銘板として残るだけでした。前ページの写真とほぼ同じ場所からの現況撮影



前ページの写真の手前にある細道の真上に架かった歩行者専用の跨線橋からの写真です。遙か彼方の今も変わらぬ高圧送電柱に注目下さい。池が埋め立てられ、そこに建てられた関大自動車部合宿所の看板が、写っています。

電柱に西永楽の銘板が、線路の東側には東永楽の表示もあります



跨線橋銘板に残る「永楽園」の名前

突き当たりまで行くと金網の向こうに、一中跡地に建ったジャスコの駐車場の屋根が見え、一中裏口があった場所のようでした。通りがかりの人に尋ねると、近くにジャスコへの入口もあるとのことでした。

千里山開発当時の開発地平面図には「永楽園」の部分が欠落しております。昭和7年の国土地理院の千里山地図では「永楽園」の地名はありませんが「永楽園」内の道筋と「永楽園の池」は確かに載っております。大阪住宅経営会社が千里山住宅地の一部として同時に開発したと考えるのが妥当なのですが、「永楽園」だけが住宅地から少し離れて孤立した場所であり、規模も小さいので別の会社が独自に開発した可能性も捨てられません。「70年のあゆみ」には「永楽園」の写真がありますが説明は一切なし、「今昔展図録」には「永楽園」の記述は見られません。但し両資料に転載された児山攻氏作成の「昭和20年頃の千里山の図」には一中裏門と共に「永楽園」が記載されております。

関西大学百年史によると「千里山駅北東の永楽園池ノ上(現吹田市千里山月が丘)の丘陵地約九千坪(二万九七五〇平方メートル)を昭和二十四年七月に京阪神急行(現阪急電鉄)から購入し、ここに昭和二十六年八月教職員用の住宅五棟を建て、恵風園住宅と名付けた」とあります。小生の同期の中井君の家がありました。

千里山線延伸に伴い阪急との間で土地交換も有ったはずですが「永楽園の池」埋立て地やその周辺に関東の寮や合宿所が多い理由が判りません。

後記

本稿の原稿を当時「永楽園」に住んで居られた会員の23金尾景子さんにお送りして事実関係や思い出など追加して頂くようお願いしたところ、弟さんの25尾崎光彦さん(神戸市在住)に協力を依頼して頂き、お二人から、いろいろ調べられた結果や思い出、昔の貴重な写真をお送り下さり、小生の知らなかったこと、思い違いなど多数教えて頂きました。次ページ以降に謹んで掲載させて頂きます。ありがとうございます。